

次の文章を読んで後の間に答えなさい。

日本の外の「世界の読者が、「世界文学」として日本文学を読む、という」ことに話を戻そう。

日本文化、日本社会の背景の知識を深くもっているわけではなく、日本語から訳された現地語か、または英語のような言語の翻訳で読むとしたらどうだろう。

翻訳では、オリジナルの言葉の響きが伝わらないのではないかと。作品の書かれた時代、文化の背景を深く知ってこそ、初めて、作品に込められた意味がわかる。だから、原典にあたって読み込むより底の浅い読書体験になってしまうのではないかと……そう思う読者も多いのではないだろうか。

確かに、①そのような側面がある。文学作品の言葉づかいや、その文化に根ざしたニュアンスなど、翻訳されてしまうと失われるものは確実に存在する。そんな状況を、アメリカの詩人ロバート・フロストは「詩とは翻訳で失われるものである (Poetry is what is lost in translation)」という有名な言葉で表現している。

しかし、文学は原典で読むべきもので、その背景も詳しく知っていないければならない、としたら、読むことのできる文学作品は a おのずと限られてきてしまう。

外国語で文学を読めるようになるにはたいへんな語学力が必要だ。もしそれだけの語学力がないならば、本当に味わうことができるのは自国の言葉で書かれた文学だけ、ということになってしまう。

じつさい、日本の私たちは、翻訳で、ほとんどの国の文学を楽しんで

いる。①すぐれた翻訳家たちによる「翻訳としての文学」を読むことで、ゆたかな体験をしている。

しかし、日本の大学では、原典で読むことを重視する「②原典主義」がまだまだ根強いように思う。

たとえば、大学の授業では、ロシア語が読めない教授は文学の授業でドストエフスキーを扱うべきではない、と考える人が多いのではないだろうか。だから、ロシア文学を教えるのはロシア文学の専門家、アメリカ文学を教えるのはアメリカ文学の専門家……というような、完全な分野になっていくことが多いように思う。

しかし、もし文学の教授自身が読める言語で書かれた作品のみを授業で扱うとしたら、その教授から受ける「文学」は非常に狭いものになってしまう。「原典」へのこだわりをひとまず横に置き、翻訳には制約があるということをや a 留意したうえで、② はば広い文学作品を扱ってもよいのではないだろうか。

(中略)

このように説明していくと、「世界文学」の読みかたは、原典にさかのぼっていいねいに読むことを軽視しているのではないかと、思うかもしれない。

① 安易に翻訳で読むことを肯定することは、原典のよさを見失うことにつながるのか。 A、翻訳されていない作品は存在しないも当然ということにはならないか。特に英語圏の場合、英訳で読むことばかりを重視することは、現在のグローバル化で大きな問題になっている英

語中心主義を^③助長しないか、という³ひはんもある。これらの問いは、じつは比較文学研究のなかの世界文学論でも、しばしば議論のポイントになっている。

しかし、私がそうした議論を見る限りでは、「世界文学」の読みかたを肯定的にとらえている論者でも、それが原典や発祥地の文脈を無視してよい、と考える人は少ないように見える。

むしろ、世界文学論のポイントは、文学の[※]注テキストが、発祥地の外に伝わり、広く読まれるようになった現在、そのような、発祥地の外でテキストがもつ意味や価値について、しっかりと考えようということにあるように思われる。

ダムロツシュの「国民文学」と「世界文学」の対比に沿って考えるならば、原典・発祥地にさかのぼろうとする読みかたは、文学作品の読みかたのコインの一面にすぎない。その裏面には、同じくらい、いやそれ以上に豊かな文学の読みかたがあるのではないか、という発想なのだ。

B、俳句は、世界のさまざまな言語に翻訳され、HAIKUとして、日本語を知らない一般読者にも広く愛される文学形式として受け入れられつつある。五・七・五音節ではない短詩となったものをHAIKUと呼ぶことに、違和感をもつ日本の読者も多いかもしれない。

C、それもまた、俳句のもつ普遍性のひとつのあらわれとは考えられないだろうか。

いままでの「古典」や「名作」という評価にとらわれず、国境を越えた大きな流れや、共通のテーマ、問題意識を通して読むこと。翻訳や流通など、発祥地から離れて読む、そのプロセスに注目すること。文学作

品を「世界文学」として読むということをイメージしていただけたらだろうか。

このように文学を読むと、文学作品をどのように評価するか、文学作品の「価値」をどのように見きわめるか、その基準をも変える可能性をもっている。「世界文学」の最後には、この問題について考えてみよう。

かつては、文学作品は、自国の文学であれ、外国文学であれ、作品が生まれた国、書かれた言葉の文学史のなかで読み、評価されることが普通だった。世界の多様な文学作品を「世界文学」とまとめて読む、ゲーテのような見かたは少数派だったのだ。

しかし、二一世紀になって、世界の国や地域の結びつきが強まり、翻訳が増えることで、世界のさまざまな文学をひとつの世界文学として読むということが普通になってくると、^④「各国の文学として読む」ことと「世界文学として読む」ことの重要度のバランスが、後者にシフトしてくるようになる。

ある作品を読むときに、「この作品の原典の、発祥地での意味はなにか？」ではなく、「この作品が世界の読者にどんな価値を持つだろうか？」と考えるようになる。ある国や地域、言葉に特有の問題ではなく、人種や文化、言葉の壁を越えて共有されているテーマや問題意識と結びつけて読むことが重要になってくるのだ。

しかし、それは、その作品の文化的な⁴とくしゅ性、歴史性を無視して、「^⑤普遍的な価値」をあてはめて読むということではない。文学作品は、その発祥地の文化や地理、言葉、歴史に根ざしているから、それを取り去ってしまつては作品を読み違えてしまう。いっぽうで、この章で述べたように、文学作品を「発祥地の文脈」だけで読むでは、そこから離れたと

ころにいる読者には価値を持たない。

発祥地の文脈と、広く共有できる問題意識。このふたつをウ橋渡しすることが、「世界文学」として読むということの意義であろう。

それは、現代の世界にあつて、文化や価値観の違いからくる⁵しよう⁶とつにどう折り合いをつけるか、という問題に、文学の側からひとつの答えを与えている。このことは、クウエイム・アンソニー・アッピアという⁶てつがく者が、『コスモポリタニズム』(Cosmopolitanism)という著書で論じている問題でもある。

世界各地の文化が⁷相互に影響することが増え、他国についての情報も増えてきた。そのなかで、他の文化では、自分たちの文化・価値観では許されないことが行われていると気づくことも増えてきた。そのとき、あえて他の文化に介入して止めるか、相手の文化を尊重するか、という問題について、アッピアはこの著書で考えている。

この問題のひとつの解決の方法として、「あなたたちの文化はあなたたちの文化、私たちの文化は私たちの文化」といつて、お互いの文化を尊重しあうことにして、介入しない、という考えかたがある。それは「相対主義」と言い換えることもできる。

この方法は一見平等に見える。とくに、西洋の人々が自分の価値観を中心にものごとを判断していたことに比べれば、お互いの文化を尊重する姿勢は進歩しているともいえる。

しかし、この方法には問題があるとアッピアはいう。この方法では相手の文化に対しての無関心を生み、その結果、それぞれの文化が孤立して、価値観を共有するということができなくなってしまうからだ。自分たちの文化や価値観に対してひはんされたとき、「それは私たちの国の固有の

文化です」と言うことはたやすい。しかし、^⑥それは相手と価値観を共有する可能性を閉じてしまっている。

それとは反対に、「正義」「人権」などの普遍的な概念を⁸掲げて、そこから個々の文化を評価するという方法もあるだろう。しかし、その方法では、ひとつの価値観を一方的に押しつけるだけで、個々の文化の違いを尊重することはできない。

このふたつの立場のバランスを取り、どこまで価値観を語る言葉を共有できるか。対話を閉ざさないことが重要だ、とアッピアはいう。

ここで役に立つのが、世界文学とともに読むことだ、と彼はいう。文学でも、映画でもいい。価値観で対立する人々が、世界の作品とともに読む。その舞台になる文化の文脈に照らしながらも、自分にも共感できるところがあるか探りながら読む。なにが正義か、なにが人権か、という言葉の定義について同意できなくても、登場人物たちが、なにを重視して行動しているか、それについてひとりひとりがどう思うかを話し合うことはできる。

そのようなことから、^⑦「価値観」を語る言葉を共有するための議論ができるのではないかとアッピアは指摘する。

このような文学の読みかたは、「文学はその生まれた場所の価値観で読まなければならない」という読みかたとも、「文学は世界共通の基準から読まなければならない」という読みかたともちがう。価値観を共有できないが、一緒に話をしていかなければならない世界の人々と、まずひとつの文学作品を共有すること。「世界文学」という文学の読みかたには、そのような意義もあるのだ。

また、そのように考えると、自分の言葉の文学作品のなかでどのよう

な作品を世界に伝えていくか、自分の文学の読みかたをどのように共有していくか、そのヒントにもなるだろう。このような「世界文学」の読みかたには、今後さらに大きな可能性があるのではないだろうか。

（『世界の読者に伝えるということ』河野至恩 講談社）

【注】

テキスト…書物の本文、原文、原典

一、 1～8のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。
（送りがなも書くこと）

- | | | | |
|---|-------|---|------|
| 1 | すぐれる | 6 | てつがく |
| 2 | はば | 7 | 相互 |
| 3 | ひはん | 8 | 掲げる |
| 4 | とくしゆ | | |
| 5 | しょうとつ | | |

二、 ア・イ・ウの意味を書きなさい。

- ア 留意
イ 安易
ウ 橋渡しする

三、 a・bのことばを使って短文を書きなさい。

- a おのずと
b 折り合いをつける

四、次の問いに答えなさい。

問 1 ——— ①「そのような側面」とは、どのようなことを指しているか。

問 2 ——— ②「原典主義」とあるが、日本の大学における「原典主義」

について、筆者はどのような問題点を指摘しているか。説明しなさい。

問 3 空欄 **A**・**B**・**C** について、当てはまる接続詞を、

次の中からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

ア しかし イ たとえば ウ だから エ また

問 4 ——— ③「助長」は故事成語である。次の 1～4 の故事成語に

ついて、その意味を後の選択肢からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

- 1 助長
- 2 蛍雪の功
- 3 塞翁が馬
- 4 呉越同舟

【意味】

- ア 古い物事にとらわれて融通の利かないこと。
- イ 大変苦勞をして勉強し、報われること。
- ウ 人生の幸福や不幸は予測できないこと。
- エ 仲の悪い者同士が一つ所にいること。
- オ ある傾向を著しくすること。

問 5 ——— ④『『各国の文学として読む』ことと『世界文学として読む』

こと』とあるが、次の 1～5 はどちらにあたるか。「各国の文学として読む」は **ア**、「世界文学として読む」は **イ** と答えなさい。

- 1 その国の言語の特徴をとらえ、その背景にある人々の思考パターンをふまえながら文学を読んでいくこと。
- 2 各国の宗教的背景を比較しながら、地域ごとの言語や習慣における共通点を見いだしながら文学を読んでいくこと。
- 3 ある作家の母国の人々が、彼の作品をどのように受け止めたのかをふまえながら文学を読んでいくこと。
- 4 その作家の祖国の文化を学び、作品がその国の歴史とどのような関係にあるのかを正確にとらえながら文学を読んでいくこと。
- 5 その作品の主題が現代社会において、どのような意義を持っているかをふまえながら文学を読んでいくこと。

問 6 ——— ⑤ 「普遍的な価値」を具体的に説明している部分を三〇字以内で抜き出しなさい。

問 7 ——— ⑥ 「それは相手と価値観を共有する可能性を閉じてしまっている」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問 8 ——— ⑦ 「『価値観』を語る言葉を共有するための議論ができるのではないか」とあるが、「世界文学」を読むことで、このような「議論」につながるのなぜか。説明しなさい。

問 9 次の選択肢のうち、本文の内容と合致するものを次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 「世界文学」として読む場合、読者は、発祥地や作者などの原典にもとづいて考えなくてはならない。

イ 世界文学をめぐる議論では、翻訳されない作品が軽視され、英語中心主義に偏るといふ問題点が挙がる。

ウ 俳句のように世界で認められた文学は普遍性があるため、各国で同じ形式で受け入れられるようになった。

エ 「相対主義」は、これまで自国の価値観を中心としていた西洋の人々にとって当たり前の姿勢であった。

問 10 15 ページ「……」他の文化では、自分たちの文化・価値観では許されないことが行われている」とあるが、実際に、世界で文化や価値観の違いによって生じている問題を一つあげ、それについてのあなたの意見を二〇〇字以上で述べなさい。【二枚目の原稿用紙に解答すること。】

1 すぐれる 優れる	2 はば 幅	3 ひはん 批判	4 とくしゅ 特殊
5 しょうとつ 衝突	6 てつがく 哲学	7 相互 そうご	8 掲げる かかげる

ア 留意 ある物事に心をとめて気をつける こと	イ 安易 深く考えないこと 分けもなくできること
ウ 橋渡しする あまり面識や交流のない両者 の間に入ってとりもつこと。 仲立ちをすること。	

三 a おのずと (例) この本は内容が難しいが、 繰り返し読むことで、おのずと内容が理解でき るようになるはずだ。	三 b 折り合いをつける (例) 私たちは長い時間をかけて話し合いをしてきたが、 やっとこの問題 の解決策について折り合いをつけることができた。
--	--

四 問 1 翻訳された文学作品を書かれた時代や文化背景を知らずに読むことで、 浅い読書体験になってしまおうという側面。	問 2 語学力が必要となるため読む本が限られてしまい、文学の授業も分業制のように専 門が決まってしまうため文学の知識のはばが狭まってしまおうという問題点。
--	---

⑤ 五	①	ク	問 10 解答省略	問 9 イ	問 8 価値観の対立があったとしても、一つの同じ作品の文脈に照らしながら、それぞれが共感できる所を探ることで、一つの文学作品を共有し、それについてそれぞれの考えを話すことができるから。	問 7 お互いの文化を尊重し合い、介入しないという方法は、相手の文化に対する無関心を生み、それぞれの文化が孤立してしまうから。	問 6		問 5	問 4	問 3
	②	カ					問題意識	人種や文化、言葉の壁を越えて共有されているテーマや	1 ア	1 オ	A エ
	③	イ							2 イ	2 イ	B イ
	④	オ							3 ア	3 ウ	C ア
	⑤	ケ							4 ア	4 エ	
	⑥	ウ							5 イ		
	⑦	コ									
	⑧	ア									
	⑨	エ									
	⑩	ア									

問 2	問 1	四	b 折り合いをつける	a おのずと	三	ウ 橋渡しする	ア 留意	二	5 しょうとつ	1 すぐれる	一
									8 掲げる	4 とくしゅ	

